

京鹿子

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可
甲辰十七年二月一日發行
通巻九六六号、毎月一冊、日發行



2月号

初 笹 子
丸 山 佳 子

初 句 会 自 信 に 満 ち た み な お 顔

耳 よ り も 心 で 聞 け と 初 笹 子

ひ り ひ り り 鳶 か ら 電 話 尾 花 村

立 入 禁 止 の 尾 花 に 体 温 吸 は れ き し





トンネルを一ぬけ二ぬけて雪の界
矢も楯も味方もいらぬ軒つらら
火の用心赤い太字に山眠る
裸樹のほか人間を怖る猿
枯葉よりかるい返事で合ふ三人
料理長の指の先から春来る

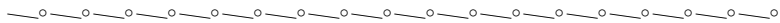


清響集
その四十六

豊田都峰



すすきゆれふるさとのゆれ日暮れけり
恋塚や綿虫ふたつ浮かしゐる
今日もまた沖向く鴨を見てしまふ
浮寝鳥早くもひぐれの中にある
冬めくや雲ぬがぬ山にかこまれて
日のころげ入る山ひくく桑枯れて



マフラーを赤色にせむ野に出るに

マフラーをはづして山に對ひけり

冬帝に後のぞかれゐる木立

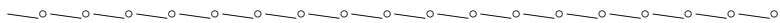
凧の夜は発光す幹ばかり

初詣遠き祖よりのあまねく日

賀状句

暁鶏や事なき事の初便り

ウエップ俳句通信24号七句出稿



秀華採集

銀河あふれ身ぬちの水位とりもどす

井上 菜摘子

きらめく星を見上げて、清新の気をとりもどすのだが、たいへん詩的に表現している。特に「身ぬち」の措辞を高く評価したい。作者は作者なりの方法を身に付け始めている。一つの個性的表現の誕生を祝福しはじめている。

風と来て夕日に帰る赤とんぼ

三浦 永子

この「赤とんぼ」は永遠性を獲得したと言ってもよい。誰の心にも飛んでいくから。「風と来て」は風来をふと思わせたりするが、特に「夕日に帰る」がよい。

鈴鹿 仁

冬 川

眇して冬の像かたちとなる一鳥
嵯峨がらすゐて冬川を眠らせず
冬川を跨ぐ一橋ひと陽がすべる
意に叶ふことは少なし年暮るる
したたかに生き雑煮餅膨らます
平凡の凡は拾はず寒がらす
寺町の寺に籍置く寒雀

近 詠

宇都宮滴水

いつぽんの木

がらんどろの宙は一色雪鴉
いつぽんの木としてゆれり十二月
流れにもあとさきのあり川涸れる
湯どうふの湯氣にまみゆる貌と貌
落葉焚きけむたき日課始まれり
注連明けの遍く刻を拾ひゐる
凍み空の臨界くづる異変あり

神麓集



落葉焚く円錢厘に新条例
立冬の明治通宝朱の文字
初しぐれ上に鳳風下に龍
旧紙幣回収めざす冬浅し
統一のゲルマン紙幣紙を漉く

林 日圓

北村 香朗

震度七の惨に無力や夜の冷え
秋深き岩間に小さき命生く
秋深し復旧の目途も新幹線
熊飢えて村落の柿貧れる
石垣を縦横にいま蔦紅葉

屋根職人 丸山 冬鳳
屋根職人声を降らして台風晴れ
鳥声や祖田晴ればれと穠色
合歡は実には鞘のふさふさ瀨音晴れ
旗めきて二流の雲の秋深かむ
虫が虫運ぶ秋風日向道

月光の重みにはらと朴落葉
袴着や末弟にして小甚六
あぶられて口開く貝や浜小春
返り花一片の見得なほ持てり
初鴨に湖いちまいの水ごころ

朴紅葉 藤岡 紫水

山田 耕子

帰省して生家のめぐり夕ちちろ
あかときの雲の立山輝きそむ
一筋の生家の道や柿うるる
子の手引きめぐる古郷蝶翔つる
案内の道の細しや野菊咲く

目も耳も弱けれど菊を焚く香り
簪は母ゆづりなる七五三
古米古茶われも老いたり日の短か
句がゆがみ夜長はなせぬ虫眼鏡
柿甘し熊出る里より送り来て

吉田 多美

神麓集



鷄来る焦げ跡しるき蕪紋
 旅仕度はじまる神の蕪紋
 歸り花活水の神と崇められ
 藩芽請役の劍豪墓秋思
 歸り花光陰われに過ぎやすし

角 直指

聞耳のみの虫下で果つ話
 旭の稲田鐵路が二本筋通す
 葬りみち外れて福寿の烏瓜
 栗貫ふリスがお手して木魚音
 区画受く垣根夢遊のお茶の花

彌寝 瓶史

信 樂 丹生をだまき
 芒招く山一つ越え信樂へ
 窯元をはしごして行く小春かな
 小山ほどの寝狸も置き秋うら
 信樂狸の百態照らす里の月
 乾山の皿絵の桔梗きほひ立つ

コシノヒロコ展 山田をがたま
 秋陽ざし個性は才能として展く
 無国籍のドレスの綺羅や秋うらら
 意表つく紙のドレスや爽やかに
 空澄みて「花」の一字の匂ひたつ
 あふれ出るパワーを浴びて秋陽燦

夕波は流離の色に雁渡る
 長き夜の心にかかる誤字一つ
 萩を刈るこれほどまでもと思ひつつ
 しぐるるや葉の如く猪口一ぱい
 枯尾花山遠ゆらす子守唄

船越 美喜

人知れず 大塚 まや
 人知れず散る式部の実地震遠し
 秋蟬の熄みしを知らず煎茶汲む
 産土や紅葉ちりばめ京盆地
 小雨来て一刷毛色を実紫
 まなうらに曼珠沙華憑き弥陀の前



京鹿子集

豊田都峰選

銀河あふれ身ぬちの水位とりもどす

肩凝りの肩より傷む菊人形

振り洗ふわが荒肝や秋澄めり

狐畏星のしづくの汚れけり

船虫の逃げ足ばかり見て帰る

秋日ふかぶか聞きたきものに母の声

風と来て夕日に帰る赤とんぼ

落日のふれんと風の芒かな

小春日やあるじが消えし車椅子

秋の蝶触るるものみないのち褪せ

亀岡 井上菜摘子

横浜 三浦 永子

追分の三宿をゆく霧の音

浅間嶺の噴煙近し蕎麦の花

淋しさに笑ひだしたる月夜茸

鴉鳴けり裏戸は一日中開き

鶏頭や一打一打に拜む鐘

望月を揚げ海ゆかば海詠ひ

五匹五音庭より秋を発信す

脚線美ぞんぶんに見せ鹿鳴けり

閻王の嚏か地震のまた七度

日うら日おもて十一月がすぐ消ゆる

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸